

ひな ひみこ
夷の日御子



やまとのおおきみ
(大和大王)

大和 使いの者
かぬち
鍛冶 (男)

ひみこ
(卑弥呼)

夷の国 日御子
とよ
戸子 (女)

……

夷の国 日御子
いよ
壹子 (女)

……

日御子 後見
ふよ
夫余 (男)

――

さく
朔 (男)

……

山の豪族
(男)

……

里の豪族
もち
望 (男)

……

海の豪族

……

序

西暦 248 年 9 月 5 日、今は邪馬台国と呼ばれる倭奴（わのなの）国の王、卑弥呼が亡くなった。太陽が全て隠れた日（皆既日食）、卑弥呼は狗奴国（くなく）との戦の責めを負って殺された。調停役の魏の使者、張政（ちょうせい）の策略であった。

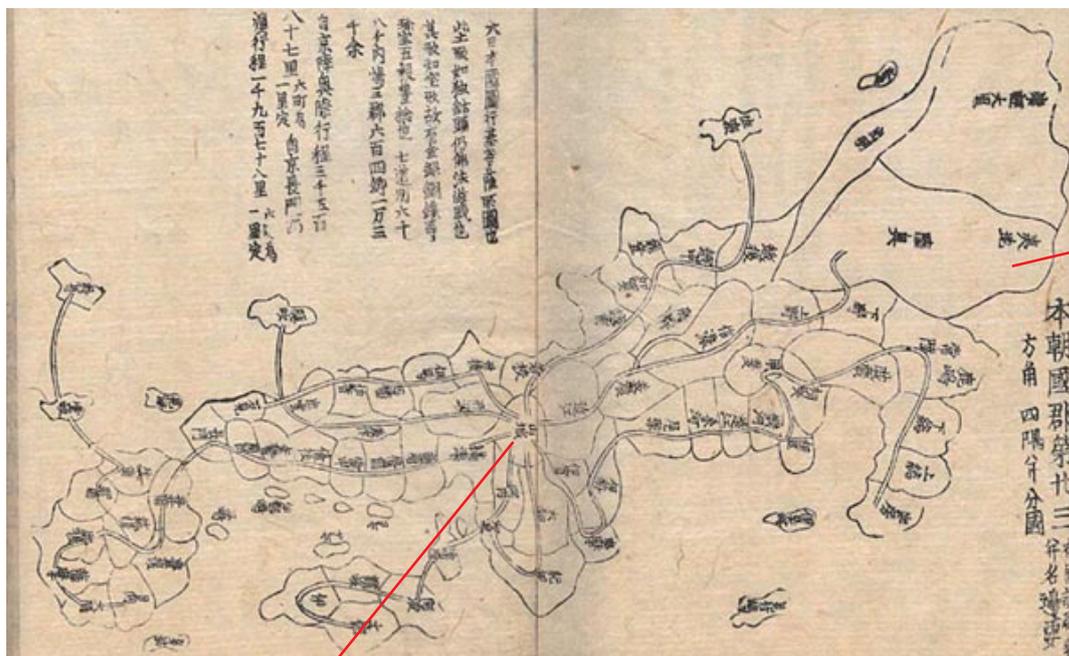
卑弥呼は太陽神に仕える日の御子（みこ）であった。彼女の「霊力の衰え」が、負けるはずのない「倭奴神軍」が敗退した原因とされたのである。その後、倭奴（わのなの）国に男王が立つが、政権は安定しない。十数年後、豪族達は台予（とよ）という日御子により、国は安定を取り戻すが、狗奴国（くなく）の侵攻は凄まじく、東へ東へと国を追われることになる。

ついに狗奴国（くなく）は、大和地方の大国主（おおくにぬし）と呼ばれる豪族を攻め滅ぼし、その慰霊のため出雲大社を建立する。そして大和地方に本拠地を移すと、ヤマト政権の大王（おおきみ）を中心として、日の本の国の統一に動き出した。

4 世紀はじめ、ヤマトの勢力はまだまだ今の仙台平野には及んでいなかった。

そして、台予（とよ）は日御子として「夷の国」の盟主となっていた。地元の豪族達からの尊敬を一身にうけ、魏の国への貢ぎ物を行い、ヤマトの勢力を牽制していた。一方、百済と手を結んだヤマトに対し、高句麗の騎馬民族である夫余族と手を結び、鉄や布や馬を手に入れ、その製造技術を学んでいた。

波乱の人生を歩んだ台予（とよ）がついに亡くなり、その後を 13 歳で継いだ壹与（いよ）。台予（とよ）の教えを守り、豪族達にも慕われながら、魏の国への貢ぎ物を続けていく。そんな十年後から、この物語は始まる。



大和の国
(ヤマトのくに)

日本最古の地図「行基図」を元に描かれたとされる古地図

夷の国
(ひなのくに)

<第一場>

「日御子さま、そろそろ刻限ですぞ」

しっかり白髪となった夫余（ふよ）がいつのまにか後ろに立っていた。

「はい、今まいります。」壹与（いよ）は銅鏡をみつめたまま答えた。

祈祷台のまわりには銅鏡をもった巫女たちが半円形の黒い器に太陽の光を集めていた。

その器には油が塗り込められているのか、眩い光を放っている。

壹与は祈祷台に昇ると懐から水晶の玉を取り出し、太陽にかざす。水晶によって集められた光は黒い器の一点を照らしている。すると静かに呪文を唱え始めた。遠くから風によって杭を打つ人夫たちの声が聞こえる。しばらくすると器に火がついた。巫女たちは松明に火を移すとおごそかに豪族達の使いへ渡していく。使いの男達は呪文を唱え続けている日御子へうやうやしく礼をすると無言で立ち去っていった。

日御子が太陽からいただいた御神火は豪族達を通じて村々に行き渡る。煮炊きの火、焼畑の火、たたら場の火と様々な用途に使われている。

「大和の使いの者がまた来ておりますが・・・」

夫余（ふよ）が苦々しそうに話す。「お会いになりますか？」

「何の用でも会わない訳にはいかぬ・・・」

壹与（いよ）はまた銅鏡をみつめたまま答えた。

「いや！見事なご祈祷でござった。

夷の豪族達も民も、日御子殿に守られて幸せなことよのお。」

この大和国の使いが来て三月が過ぎた。そろそろ交代の時期である。

「ところで墳墓の作業がかなりおくれているようじゃが、どうしてかのお？」

「はい、盛り土に使う石や土がこの辺ではもう調達できませぬ故、広浦川を使って舟で運ぼうと川幅を広げているところです。」

「ほう、それも大工事じゃ。台予（とよ）の日御子殿のためじゃ。励むがよろしかろ」

「はい、ありがとうございます。ところでお役目もそろそろとお聞きしましたが・・・夷の国の馬でよければお使いくださいませ。」

「おお！夷の国の馬をいただけるのか、それはそれはありがたいことじゃ！」

「大和の大王（おおきみ）にくれぐれもよしなお伝えくださいませ・・・」

使いの者が立ち去ると、壹与はまた銅鏡をみつめた。

「もう、あれから 10 年がたつ・・・」

<第二場>

壹与（いよ）が物心ついた時、既に両親はいなかった。何でも西国の出で神官をつとめていたらしいがそれ以上はだれに聞いてもわからない。ずっと台予（とよ）のお婆（ばば）さまが育ててくれた。お婆さまは多くの巫女達にかしづかれながら、祭祀館の奥深くに暮らしていた。時折、颯爽と馬に乗ってやってくる夫余のおじさまが唯一の男であった。

壹与は聞いたことがある。西国にいた頃、台予のお婆さまのおかか様は千人もの女達に守られて暮らしていた。しかし、ある時、戦に破れ、その責めを負わされておかか様は亡くなる。

その後、男の王が国を治めたのだが、争いが絶えず、13才の台予お婆さまが跡を継ぐ。なぜなら「鬼道」ができたからである。台予のお婆さまのお告げで国は治まるのだが、再び戦に負けて国を追われることになる。そして夫余おじさまの一族の助けによって、この東国に流れ着いたということである。

「台予のお婆さまも13才で日御子になられた……」

10年前になる。台予（とよ）のお婆さまは死期が近づいたある日、有力な豪族を一堂に集めると残された力を振り絞り、祈禱台に昇った。

「夷の日御子は壹与とする」 どよめきが起った。さらに続けて

「その後見は夫余！」 そして

「我が亡がらをこの地に大和式にて祀れ！」 そういい残すとその場で息絶えた。

どよめきが走った。すると雷が鳴り響き、豪族達はその場にひれ伏した。

壹与（いよ）はずっと台予のお婆さまの身の回りの世話もしていたせいも、「鬼道」のまねごとぐらいはできた。しかし、あくまでまねごとである。呪文の言葉が何を意味しているのかさえ知らなかった。

しかし、台予のお婆さまにとって、男王になると国が乱れることは小さい時の経験から知っている。豪族たちがしっかりと話し合い、最後に日御子がきめるというやり方が良いと考えるのは当然であった。

そして後見の夫余であるが、高句麗出身の父をもち、その一族の名をそのまま継いでいる。土地は持たなくとも馬の飼育に優れ、また、鉄器の技術にも通じていた。さらに騎馬技術は群を抜いており、戦さにも優れた力を発揮していた。壹与の参謀兼用心棒としては最適であった。

最後の大和式の墳墓であるが、奈良の箸墓古墳（卑弥呼の墓）に倣おうというもの。大和への従順を示す台予の策略だと考えられる。今、大和の力はこの地までは及んでいないが時間の問題であった。そのためには大和に匹敵するだけの力を蓄える時間と資金が必要だった。

台予が定めた植松の地は愛島丘陵から大きく張り出した東の果てにある。この時代、海岸線は現在よりも内陸部にあった。しかし、海岸線の流砂が激しく、小さな河川の出口を塞ぎ水の行き場を失って、洪水をたびたび引き起こしていた。葦が原がどこまでも続いていた。

この植松の地を東の拠点とし、西の高館山までの丘陵を長城の代わりとして整備できれば一大防御拠点となり得る。夫余はそう考えていた。

さらに広浦川（現・増田川）を使えば、広浦を通して名取川・太平洋とも通じる水軍の要となる。加えて平時には高句麗などとの貿易拠点として使用することも可能であった。実際、毛皮・馬・昆布などのかわりに米・布・鉄などを得ていたらしい。

加えて大和国に抗するには日本海側の豪族、そして津軽などの北方の豪族とも連携をしていかなければならない。この策を高句麗も後押ししてくれるのではと考えていた。

大和式の墳墓にこだわったのも、大規模な土木工事をしても疑われず、その技術を取り入れることができる。さらに大和国には呪詛思想があり、恨みを持って死んでいった者の祟りがおこらないように鎮めることも、権力者の大事な政（まつりごと）であった。大規模な墳墓を作らせることは夷の国の力を削ぎ、祟りを防ぐためにも一石二鳥の良策だと大和政権が考えたとしても不思議ではない。

壹予は時間をかけて豪族や民の負担にならぬ様、ゆっくりと墳墓の工事を進めていった。

<第三場>

夫余の息子、朔（さく）が祭祀館に駆け込んで来た。

「壹予さま、大変です！ 豪族達が川岸で、もめています！」

父が停めに走っています！」

姉弟のように育った二人、うなずくとおつきの巫女がとめるのも聞かずに、壹予は朔の馬の後ろにとび乗った。

この時期、夷の国の河川ではサケマスが遡上して産卵をする。生まれた稚魚は海に出て数年後、また母なる川に戻ってくる。冬が近いこの時期、貴重なタンパク源であった。

下流の豪族が網を使って、全ての鮭を獲ろうとしていた。それを上流の豪族達が見つければ、争いになっていた。夫余が間に入り、お互いの言い分を聞いているようだったが、なかなか鋒を収めることは出来ない様子だった。

「おらの領地の中でサゲを獲ってんだから、文句ねえべ！」

「おらの川で卵から稚魚になったんだからおらの村のもんだ！」

そこに、壹予が表れた。豪族達は一瞬びっくりした様子だったが、今度はそれぞれの主張を壹予にぶつけ始めた。

「わかりました。それでは鮭にどこのもんだか聞いてみましょう」

そういうと壹予は川岸に捕まえられていた1匹の鮭を取り上げ、天にかざした。

掲げられた鮭はしばらくすると、元気よく川に飛び跳ねて泳いでいった。
「鮭は河の神のものだと言っています」豪族達はあつけにとられている。
「それゆえ、今後一切獲ることは禁じる」溜息がこぼれた。
「しかし、河の神を祀る神事のために獲ることは許すと仰せじゃ」
夫余は大きくうなづくと川岸に捕らえていた鮭を全て川に返した。

<第四場>

今日は壹与の日御子の呼びかけで新嘗の神事が開かれる。
豪族達はそれぞれの地域の産物を大量に持ち寄る。もちろん先日の鮭も大量に奉納された。
壹与の日御子はいつにも増して丹念にご祈祷を行うと、まず、あの鮭を全豪族達に配り始めた。すると、山の豪族達が栗や木の実を配り始めた。それを見ていた里の豪族達はひえや栗や豆、そして海の豪族達も塩や昆布などを配り始めた。
「いやあ、こんな大きな栗、初めてみた。」
「そんなんで良ければ、今度持ってんから」
「んでは、昆布や魚、用意して待ってっから」との声があっちこっちから聞こえる。
壹与の日御子がめざしたのは夷の国に昔からある「贈与」の風習を広域で勧めることであった。お互いの生活を知る事によって理解が深まり、相互補助の絆が深まるのである。
政（まつりごと）は奉り、そして祭りが起源と言われている。自然に感謝し、自然の畏怖を感じ、それを敬う事によって生活が成り立っていく。
この時代、生活の中に神々はいきていた。

そんな壹与をおもしろく思わない豪族がいた。里の豪族、望（もち）であった。彼は大和国の使者から稲作のことを聞いていた。西国では大規模な水田を作り、毎年収穫しているという。連作障害がないためだが、しかし夷の国では稲作はヒエや粟と同じく畑で育てていた。大きな水田を作ることを先代の台予が認めなかったからだ。水田は灌漑排水などの設備が必要なことを考えると一豪族の力では到底できないため、どうしても盟主である日御子の力が必要であった。壹与も台予に習い、認めなかった。

台予のお婆さまが言っていた。
「稲は貧富の差を広げ、水などの奪い合いから戦の種となる。
まして寒い日が続くと、稲は南方のもの故、実らない。
その土地にあった穀物を何種類も育てることが自然の摂理にかなっている。」
壹与もそう思っていた。しかし、望はどうしても水田が作りたかった。そして財力を蓄えゆくゆくは夷の国の盟主になりたいと考えていた。

<第五場>

大和国からあらたな使者がやって来た。名を鍛冶（かぬち）という。鉄や銅の加工を得意とする役人であった。鍛冶は墳墓造成の指導の他に密命を受けていた。それは夷の国に鉄鉱石が産出しないか調査することであった。

鍛冶が夷の国に赴任して間もなく、彼は望（もち）の館にいた。

「いやあ、こんな田舎へよくごぞった。なんもねえけど、ゆっぐりしてけさいん」

「かたじけない。望どの。ところで墳墓造成の進み具合が遅いように感じるが・・・」

「10年たってもまだ半分もできてねえす。壹与の日御子さまは熱心でねえのがも・・・」

「そんなことはあるまい。台予どののは壹与どののにとって実の母より大切な方とお聞きしている。何か工事の障害になっていることがあるのかと思つてな？」

「夫余どのが鉄の刃先を工具につけてくださってからは、工事もだいぶ楽になりました。」

「鉄の刃先だと？夷の国では鉄もとれるのか？」

「川砂からとれる砂鉄を小さなたたら場で加工していると言う話しです。」

「ウーム。」

大和国でもやっと鉄の刃先をつけた工具ができ、近頃土木工事が進むようになった。

「で、この工具があれば水田も作れるんじゃないかねえかと壹与の日御子さまに頼んだのですがどうしてもダメだとおっしゃる。鍛冶さまのお力で何とかならぬでしょうか？」

これは鉄の採れる山を隠し持っているに違いない、そう考えた鍛冶は

「あいわかった！わしからも頼んでみよう！」と望の頼みを聞き入れた。

<第六場>

あくる日、鍛冶は壹与の祭祀館に居た。

「壹与の日御子どの。どうも工事の遅れは神の心に合わぬものがあるのではないか？」

「そう申されますと・・・」夫余が代わって答える。

「台予の日御子どののは雷に打たれてなくなったと聞く。大和では雷は稲作を守る神。

稲の実が入る頃に雷がなると豊作になると言われている。

つまり、稲と雷は夫婦のようなもの。それ故に稲妻とも言うらしい。」

完全な言いがかりだが、壹与は静かに聞いている。

「それでじゃ、この冬に灌漑や排水を整え、水田を作り稲作を始めてはどうじゃな？」

「それには近隣の豪族から人夫を出してもらい、鉄の刃先がついた工具も必要じゃな。」

夫余はハッとした。鉄はこの時代、非常に大切なものであった。朝鮮半島でも南部一帯にある鉄の産地を得るため、高句麗をはじめとする強国がその支配を狙っていた。

「はい、承りました。早速、日を見て占ってみましょう。」

壹与は静かに答えた。

<第七場>

祈祷台から日御子の壹与が突然叫んだ。

「夷（い）の方角！夷の方角に新田を作るべし！」

居並ぶ豪族達、中でも夷の方角つまり東側に住む海沿いの豪族達は特に驚いた。今まで農業というものをしたことがなかった。里の豪族、望は自分の領地に水田は作られるものと考えていたため、うろたえた。

「お待ちください！夷の方角にはそのような土地がございませぬ！葦が原です！」

「御子の御託宣に従わぬと申すか！」夫余が望（もち）を睨みつけた。

「今、広浦川の川底をさらい、川幅を広げ、大きな舟が通れるように工事をしておる。

その際、隣地に川から水をひき、葦を刈って広浦に流れるようにすれば水田が作れると思うが、一同、どう思うか？これならご託宣に適う！」夫余が皆を見回した。

「その新しい土地はだれのものになるのか？」鍛冶が問う。

「それは、御託宣をくださった壹与の日御子さまのものじゃろうが。」

豪族達にはわかっていた。壹与のものならば収穫した米は奉納後、皆に分け与えられる。

一同は人夫を出す事を承知した。さらに夫余が鍛冶にも聞こえるように大声で続けた。

「その際、すまぬがそれぞれの郷から鉄の刃先がついた工具も持ち寄ってください！

小さなたたらばでは皆の衆全部の工具は用意できないでな。」

<第八場>

新田づくりのため、一時工事が中断された台余の墳墓の上に壹与たちはいた。

日は照っていると言うのに、遠く西の山から冷たい風が吹き付けている。

「もうすぐ雪になるやもしれぬ・・・」

夫余がその風にも飛ばぬようにと小さな祠を懸命に石で囲っている。

祠の中には夫余によく似た雷神が祀られていた。

「お台予さまは雷神のような男は好かんと思うがのう！」夫余がつぶやく。

壹与はクスッと笑うと

「お婆さまはこの夷の国と夫婦になられたのじゃ！

だから千年後も二千年後も、ここでこの地を守ってくださる！」

夫余も大きく頷いた。

夷の国の行く末を暗示するかのように青空に風花が舞う。

二人はいつまでも祠に向かい、手をあわせていた。